吹田市立博物館
SUITA CITY MUSEUM

博物館だより

NO.23

SUITA CITY MUSEUM

国立民族学博物館名誉教授。国際基督教大学卒業後、國學院大學大学院を修了し、カリフォルニア大学博士号取得。専攻は考古学、文化人類学。主要著書：『狩人の大地』（雄山閣出版）、『縄文学への道』（日本放送出版協会）。近著：『世界の食文化７　オーストラリア・ニュージーランド』（農文協）。
平成16年（2004）6月1日、吹田市立博物館館長に就任。

市民に開かれた博物館

いま世界の博物館が大きく変わろうとしています。これまでは、薄暗いガラス戸のなかに、ほこりをかぶった骨董品がならぶ、ガランとした場所というイメージでした。しかし、興味深いテーマをとりあげ、モノのほかにも、音楽や舞踏、芸術家の制作のようすをみせる博物館が多くなりました。ミュージアムショップやレストランも充実して、ボランティアに案内されて子どもたちがつぎつぎと通り過ぎる、まるで街角に立っているような気がするほどです。

なぜこんな変化がおきたのでしょう。一つはモノは単なる物体ではなく、それを作った技術、使い方、修理、手入れ、使用しなくなった理由などさまざまな情報がこめられていることに気がついたからです。梅棹忠夫さん（国立民族学博物館初代館長）はこれからの博物館は博情（報）館であるべきだといっています。モノは見るだけではだめだ、さわったり、使ってみなければ本来の意味はわからない、それは楽器を例にとるとよくわかるでしょう。しかし、貴重な文化財を守るためには、触れてもらうわけにはいかないという博物館の役割もあるので、複合的な演示（見せ方）の力量が問われるところです。

もう一つ、博物館に対する市民の意識が大きく変わってきたことがあげられます。陳列品を漫然とみるだけでは満足しない、こういうものをこういう風に見たいという、市民がふえているのです。博物館は、地域の文化力をあらわす場所だといえるでしょう。そのために皆さまに積極的に参加していただきたいと思います。市民に開かれた博物館になることを願っています。

吹田市立博物館
館長　小　山　修　三

平成16年度特別陳列
（2004年度）

千里丘陵の須恵器 —古代のハイテク工場—

会期　平成16年10月16日（土）～11月28日（日）

「須恵器」は灰色をした陶器で、粘土紐を積み上げておおよその形を作った後に轆轤（回転台）を使って形を整え、山の斜面に築いた穴窯で焼成しました。これは４世紀に朝鮮半島において発達した陶質土器の技術で、４世紀末～５世紀初め頃に朝鮮半島から渡来した陶工たちがこの高度な製陶技術を北部九州に伝え、日本の須恵器が誕生しました。須恵器は主として瀬戸内海沿いの地域に瞬く間に東へ広まり、縄文時代以来の伝統で作られた赤焼きの、軟らかい素焼き土器を日常の容器としていた人々は、以後、用途に合わせて２種類の土器を使い分けることができるようになったのです。

大阪北部に位置する千里丘陵は古大阪湖・古大阪湾に300万～20万年に堆積した粘土と砂礫とが幾重にも重なった地層（大阪層群）が、六甲変動と呼ばれる地殻変動によって隆起した地形で、丘陵内の幾筋もの河川による浸食作用によって開析谷が発達し、窯を築くのに適した地形と良質な粘土とが揃っていました。

大阪北部地域に到達した陶工たちが千里丘陵に最初の窯を築いたのは今からおよそ1600年前のことで、それは現在、吹田32号須恵器窯跡（吹田市朝日が丘町）と呼ぶ窯です。この窯は端正な長方形の床面や方形の煙出し穴などを持つ小型の窯で、出土した器台鉢部の破片には斜格子文・鋸歯文・連接鋸歯文などの丁寧な手描き文が施されており、まさしく渡来第一世代の陶工が築いた窯として記念すべき窯といえます。以後300年に渡って千里丘陵は須恵器の一大生産地帯としてその歴史的役割を果たすこととなるのです。

千里丘陵において現在確認されている須恵器窯跡は100基を超え、その分布は丘陵の東南部と西北部の大きく２つの地域に密集しています。東南の吹田市域にあるものを吹田窯跡群、西北の豊中市域にあるものを桜井谷窯跡群と呼び、両者を合わせて千里古窯跡群、或いは大阪府北部古窯跡群と称する場合もあります。

吹田窯跡群は５世紀前半に短期間だけ操業された吹田32号須恵器窯跡と吹田54号須恵器窯跡（吹田市山手町４丁目）とを除くと６世紀に入って本格的な操業が始まり、当初より窯は狭い範囲の中で群集化し、量産体制の下に生産されました。製品は主に東方の三島野古墳群全域に供給されていたと考えられています。

吹田32号窯跡出土須恵器器台（復元）

一方、豊中地域では吹田窯跡群より30～40年程早く、５世紀後半に量産化への道を歩み始めました。桜井谷窯跡群の開始は２－２

桜井谷2-16号窯跡出土須恵器（豊中市教育委員会蔵）

号窯跡（下地蔵岡窯跡）の開窯によって告げられ、主な製品の供給先は豊中台地とその周辺の古墳（群）を中心とし、その生産量は6世紀前半に最大となりました。6世紀後半にはやや減産し、丘陵全体としては生産の中心が吹田地域へ移行しています。

この生産実態の差異は桜井谷地区から吹田地区への陶工の移動という単純な構造変化ではなく、6世紀代の須恵器生産の管理者が前代から変化したためと考えられています。5世紀の陶工は、大阪のような先進地域では陶邑窯跡群に代表されるような国家或いは後の旧国単位（千里丘陵の場合は摂津国）の管轄下にあったのですが、6世紀になると、より下位の旧郡単位ほどの勢力範囲を持つ支配層（地方豪族）の手に移り、その領域内に窯場が設置されました。嶋下郡域にある吹田窯跡群では現在の垂水・江坂方面には展開せず、西隣の豊嶋郡との郡境を超えて窯が築かれることはなかったのです。

6世紀は古墳における葬送儀礼が大きく変わった時代です。古墳の墓室として横穴式石室が普及し、また、首長墓以外にも古墳の築造数が増加して群集墳が形成され、古墳の副葬品である須恵器は大量消費の時代を迎えました。その需要に応えるべく大量生産が行われ、窯周辺の燃料の枯渇によって別の地に新たな窯を築きながら徐々に丘陵深部へ主たる窯場が移動していきました。こうして千里丘陵は、同じ頃最大の生産量を誇っていた陶邑古窯跡群に次ぐ生産規模を有する窯業地帯としての地位を確立するのです。

6世紀末～7世紀前半、須恵器は大きく変貌します。器台・甕（はそう）・提瓶（ていへい）・横瓶（よこべ）など葬送に使われていた器種が消え、金属器を模倣した椀・皿、硯や塼（せん）などの新たな製品の生産が始まります。この頃、千里丘陵の須恵器生産は吹田窯跡群、桜井谷窯跡群ともに数基の窯が操業を継続しているものの、その使命を終えたように終息へ向い、吹田窯跡群では7世紀末の吹田9号須恵器窯跡（吹田市佐竹台6丁目）、桜井谷窯跡群では8世紀半ばの2－27窯跡（緑丘窯跡・豊中市緑丘5丁目）の操業停止をもって終焉の時を迎えるのです。

現代、地中から発見される多数の窯跡は、窯場を移動しながら生産を続けた陶工たちの足跡といえるでしょう。この展覧会では、須恵器の他にも陶棺（とうかん）（焼き物の棺）や瓦・塼など須恵器生産と深く関わる資料も合わせて展示し、吹田窯跡群と桜井谷窯跡群の発掘調査の成果によって浮かび上がる陶工たちの活躍の姿を描いてみたいと思います。

吹田20号窯跡出土須恵器

吹田34号窯跡

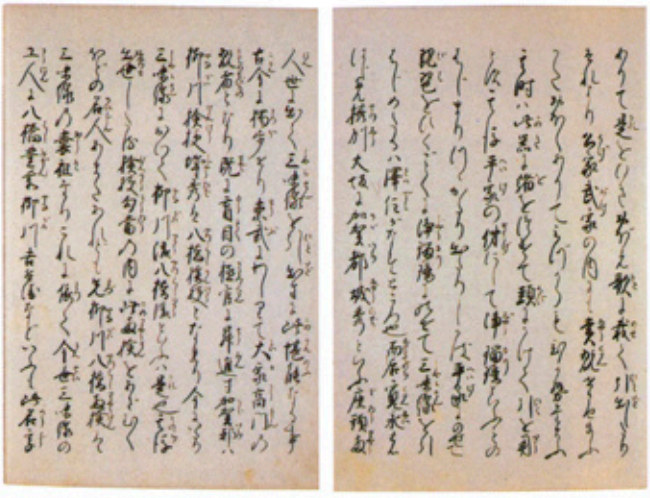
八橋検校の箏曲

平成16年（2004）4月29日から6月6日まで特別展「ことのしらべ　―琵琶法師から当道座へ―」を開催しました。この展示では琵琶や箏などの「こと」（古くは弦楽器をさして「こと」と呼んでいた）の音楽の変容を琵琶法師とその系譜をひく当道座の人々の立場から紹介しました。

近世箏曲の祖といわれる八橋検校は、新たな箏曲を作曲し、それまでの雅楽の箏曲や筑紫流箏曲と異なる箏曲を作り上げました。

八橋検校（1614？～85）は出身については様々な説がありますが、現在の福島県いわき市説が有力です。彼は寛永（1624～44）の初めごろ城秀として大坂で活動し、加賀都（のちの柳川検校）と並ぶ三味線の名人として知られていました。寛永年間に江戸に下り、琴絃商の法水から筑紫箏（筑紫流箏曲）を学びました。筑紫箏は筑紫国善導寺の僧賢順によって始められた箏曲です。城秀は寛永13年（1636）上洛して山住勾当と名乗りました。寛永16年に再度上洛した際に検校となり、山住を改めて上永検校城談とし、その後八橋検校と改めました（『色道大鏡』）。

寛永14年2月3日、相国寺住持鳳林承章が江戸で山住勾当（八橋検校）の三味線を聴いたことが、



『色道大鏡』（京都大学文学部蔵）

『隔蓂記』には書かれています。ここでも「山住后当は三美線当代名人二人之内也」と記されています。江戸時代初期、当道座の人々は三味線を主要な芸能としていました。八橋検校はその中で加賀都と技量を競っていたのでしょう。柳川検校の始めた柳川流三味線は今日に伝わっていますが、八橋検校の三味線については現在伝承されておらず、どのような三味線音楽であったのかはわかっていません。

八橋検校は、江戸で法水より筑紫箏を学びましたが、さらに筑紫国に赴き賢順の高弟玄恕より秘曲を伝授されたといわれています（『琴曲抄』）。『琴曲抄』には「八橋氏おもへらく、かのつくし楽ハ、其声最雅にして俗耳に遠しと、終に是に淫声をくハへて、新に十三曲を出す、」とあります。八橋検校は、筑紫箏が高尚な音楽で、庶民が親しみを感じる音楽ではないと考え、「淫声」を加えて新たな箏曲を作ったのです。「淫声」とは半音のことで、正ではないという意味で卑しめて使われたようです。雅楽の箏曲や筑紫箏は5音から成る陽音階ですが、八橋検校は半音を含む陰音階で調弦しました。これは、平調子と呼ばれ、箏曲の基本の調弦法です。三味線の名手であった八橋検校は三味線の音楽をヒントにして半音を取り入れました。八橋検校は正保（1664～48）頃新たな箏曲を作り、慶安（1648～52）頃完成させました。賢順によって始められた筑紫箏は、精神修行を重んじたことから、寺院や佐賀藩士の間に広まりました。しかし、高尚すぎたためかそれ以上は広まりませんでした。一方、平調子をもとに新たな調子（調弦法）も工夫され、八橋検校以後、次々と新しい箏曲が生み出されました。こうして、生田流、山田流という新しい流派も生れていったのです。八橋検校が取り入れた半音は箏曲の世界を大きく広げたといえるでしょう。

八橋流箏曲は萩（山口県）、大坂、松代（長野県）などで伝承されていたことがわかっています。山口県萩市の赤崎神社内には、天明４年（1784）八橋検校の百回忌の際に建てられた「八橋検校之碑」があり、萩に八橋流の門弟がいたことがわかります。しかし、現在では萩の八橋流は廃絶しています。大坂にも八橋流を名乗る流派がありましたが、名実ともに明治末年（1912）頃までに途絶えたといいます。その後も大阪に40～50名の八橋流を名乗る師匠がいましたが、八橋検校以後の生田流など他流と楽器や楽曲が共通してしまったので、本来の八橋流の特長は失われてしまったということです。

以上のように、八橋流箏曲は明治末年頃までに途絶したと思われていました。昭和30年（1955）ごろ、ラジオ放送で八橋流箏曲は伝承されていないという、邦楽研究家の吉川英史氏と田辺尚雄氏の対談を聴いた長野県松代の真田しん氏は「私は八橋流箏曲を伝承している、この美しい音楽を埋れさせてはいけない」と田辺氏に「九段」（九段からなる器楽曲）の演奏テープを送られました。このテープを聴いた吉川氏は、楽器や爪、演奏法が生田流など他流と違いがあること、同名曲の旋律や歌詞に違いがあることから、この箏曲を筑紫流箏曲と生田流・山田流の間に位置する八橋流箏曲であると結論づけられました。「九段」の一段から六段が生田流の「六段」と酷似し、七段から九段は四段から六段の繰返しであることから生田流箏曲「六段」の原曲であることを明らかにされました。生田流箏曲では現在「九段」という別曲があります。吉川氏によると、八橋検校の高弟北島検校は八橋検校の箏曲に手を加えましたが、師をはばかって発表しませんでした。北島検校の高弟生田検校が北島検校の曲を広めたのが、現在の生田流箏曲であるということです。

真田家は松代藩主三代真田幸道の兄信就を祖とする家系で、八橋検校から16代目の有一座頭より真田家の女性に代々伝えられました。文政５年（1822）にまとめられた八橋流譜本が残されており、真田しん氏の演奏は譜本との大きなちがいがみられなかったといいます。真田家の人々は専門の箏曲家ではなかったために自らの工夫をせず、受け継いだ箏曲を忠実に次代へ伝承したのだろうと考えられています。松代藩では真田家だけでなく横田家、禰津家など重臣の家の女性も八橋流箏曲を伝承していました。真田しん氏の演奏によって、筑紫流箏曲と生田流箏曲の間に八橋流箏曲が位置することが確認され、八橋流箏曲が、典雅な寺院音楽から庶民に親しまれる音楽への転換となる音楽であることが証明されたのです。こうして、八橋検校の箏曲以後、当道座で箏曲・三味線が主要な音曲となり、近世・近代箏曲が次々と生れていったのです。

この特別展では関連事業として八橋流箏曲の演奏会を行いました。これは真田しん氏と娘の真田淑子氏より伝授を受けた八橋流箏曲保存会の皆様に演奏していただきました。この演奏会では、爪の形状、姿勢、演奏の技法など、八橋流箏曲の特徴を目や耳で確かめることができました。なかでも、三や四などの弦を現在の一音や半音よりさらに低めに調弦することは、明治に西洋音楽が導入されるまでは日本独特の音感があったことを示していて興味深いものでした。

また、八橋流箏曲だけでなく平家琵琶の演奏会も行いました。当道座の流れをくむ平家琵琶の演奏者は現在では今井検校勉氏だけとなりました。これらの歴史的音楽が今後も継承されていくことを願っています。

八橋流箏曲演奏会

市内文化財紹介

護国寺の絹本著色「般若菩薩像」

護国寺は、吹田市高浜町に所在する曹洞宗の寺院で、足利将軍家ゆかりの由緒ある禅刹です。当寺は、康暦２年（1380）、竺山得僊により大徹宗令を開山第一世に招請して開創され、はじめ護久寺と号しました。大徹のあとを次いで第二世となった竺山は、曹洞宗の厳粛な宗風をもって門弟を指導、当寺は多くの俊僧が集い来たり、大いに興隆したと伝えられます。室町幕府第三代将軍足利義満は、明徳２年（1391）護久寺を祈願寺とする御教書を下し、その後寺号を護久寺から護国寺へ改めさせました。また義満は護国寺を五山（鎌倉時代末より設けられた官寺制度、京都・鎌倉の臨済宗寺院各五箇寺が列せられた）に準じようとしましたが、竺山はこれを固辞して受けなかったといいます。

このように足利将軍家と深いゆかりを伝える護国寺には、国の重要文化財に指定されている絹本著色「般若菩薩像」１幅（写真）が伝来しています。現在東京国立博物館に寄託されていますが、平成４年（1992）当館で開催した開館記念特別展「北摂の仏教美術－聖と民衆の祈り－」の出陳で里帰りし、その優美で格調高い作品は多くの人々を魅了しました。今回は、この護国寺の「般若菩薩像」の紹介をしたいと思います。

般若菩薩の名は、あまり聞き慣れないかもしれませんが、密教で成立した尊格で、般若波羅蜜（多）菩薩ともいいます。般若は「最高の智慧」、波羅蜜は「悟りへの修行の完成」の意味があり、般若波羅蜜で、「最高の智慧の完成」となります。大乗仏教では、仏は慈悲と智慧をもって衆生を救済するとされており、般若菩薩は、まさに仏の智慧を象徴する尊格といえるでしょう。

護国寺の「般若菩薩像」は、縦104.2cm、横58.5cmの画面に、正面を向き、六角獅子座上の蓮華座に坐す般若菩薩を描いています。画絹のところどころに剥落があり、特に右眉部や唇の朱の剥落が惜しまれますが、尊容を大きく損なうには至らず、昭和35年（1960）の保存修理をへて、美しい姿を

重要文化財　絹本著色「般若菩薩像」（護国寺蔵）

今に伝えています。気品あふれる豊満な顔には、額中央に第三の目があり、またふっくらと肉付きのよい腕は六本で、三目六臂の密教尊像特有の異形の姿をしています。六本の腕は、六波羅蜜を表すとされ、菩薩が悟りに至るために実践すべき六種の徳目、①布施（与えること）、②持戒（戒律を守ること）、③忍辱（苦難に堪え忍ぶこと）、④精進（真実の道をたゆまず実践すること）、⑤禅定（精神を統一し、安定させること）、⑥智慧（真実の智慧を得ること）を意味しています。六本の腕のうち、左手第一手は般若経典が納められている梵箧を胸前で捧げており、これは智慧を本誓とする般若菩薩のシンボルとされます。本像のように般若菩薩像のみを描く独尊の画像は稀ですが、その姿形は胎蔵界曼荼羅の持明院の中尊に配置されている尊像（図１）と同じであることがわかります。

図1　『大正新修大蔵経　図像第一巻』所載の般若菩薩（胎蔵界曼荼羅）より

次に描線や賦彩をみると、肉身は白色であらわされ、朱色で輪郭線をひき、それ以外の衣や台座の輪郭線は墨で引いています。宝冠や甲冑の袖、瓔珞などの装身具は光をおさえた金泥を塗り、着柄の袖や裳は橙色、条帛は薄桃色の暖かく柔らかな色を用い、地模様には截金で角渦巻文や団華文など華麗な文様を施しています。衣の襞は暈しの技法で陰影をだし、肉身をつつむ柔らかな布の質感を表現しています。甲冑の胴体部は緑青、髪・梵箧・衣の縁は群青など寒色系の色をバランスよく配し、像容全体を効果的に引き締めています。二重円光背は、頭光部は内輪を緑青、外輪を群青に、身光部はこれと逆に色を配し、それぞれ内輪と外輪の間に幾本もの弧線を引き、その間を桃色のグラディーションで彩色を施しています。台座も緑青と群青を基調にリズミカルに色を配し、細緻な装飾文様とあいまって華麗に仕上げています。

本像は、美しい賦彩や截金の繊細なきらびやかさに平安後期の優美な仏画の特徴があらわれていますが、はっきりとした力強い描線や暈しを多様した彩色法に中国宋画の影響をみることができます。平安仏画の伝統様式を継承しつつ、鎌倉時代の絵画の新風をとりいれていることから、鎌倉時代中期の13世紀の制作と考えられます。

護国寺に本像が伝来してきた経緯はわかっていませんが、その制作が当寺の開創を百年余り遡ることから、他寺にあったものがいつの時代にか当寺の所有になったと思われます。般若菩薩の画像は、大般若経六百巻を読誦する大般若会の本尊として懸けられたといわれ、本像も大般若会に用いることを目的に作られたものと思われます。大般若会は、現世の安穏や国家安泰を祈願するため、宮中や寺院で臨時、あるいは恒例に行われるもので、護国寺においても大般若会に用いられた可能性が考えられるでしょう。

伝来の謎を秘めつつ、本像は崇高な美しさを放ち、時代を超えて私達に深い安らぎと感銘を与えてくれるといえるでしょう。

催し物のご案内

展覧会

10月16日（土）～11月28日（日）
平成16年（2004年）度特別陳列
「千里丘陵の須恵器－古代のハイテク工場－」
休館日　月曜日・祝日の翌日

講演会

11月14日（日）午後２時～３時30分
「摂津桜井谷窯跡群における須恵器生産」
講師　奈良県立橿原考古学研究所総括研究員
木下　亘氏
＊2階講座室。聴講無料。先着120名。

展示解説

11月３日（水・祝）午後２時～３時
当館学芸員による展示解説
＊3階特別展示室。観覧料が必要となります。

特別陳列展示トーク

11月13日（土）午前10時～午後４時
「須恵器が焼けた!?」
10:00～12:00　須恵器窯構築・焼成実験の報告会。
13:00～16:00　須恵器をテーマに様々な話題をトーク。
＊2階講座室。聴講無料。定員120名。

特別企画

12月12日(日)～平成17年(2005年)4月3日(日)
「むかしのくらしと学校」
明治・大正・昭和初期にかけての衣食住の生活用具、また、学校や子供の学習用具、遊びについてその移り変わりを展示します。むかしの道具や遊具の体験コーナーもあります。

講演会

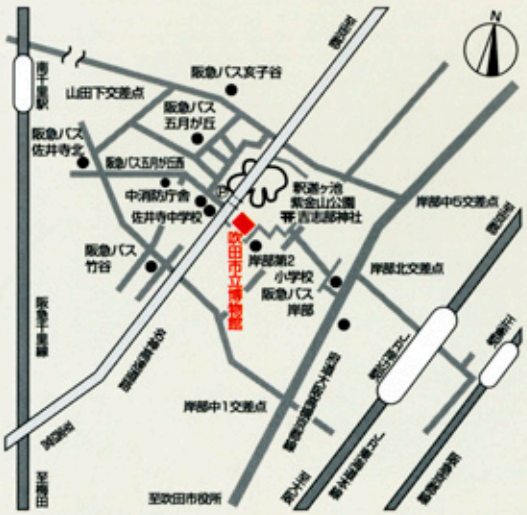
10月10日（日）午後２時～３時30分
「21世紀の食を考える
―オーストラリア・ニュージーランドの食文化―」
講師　当館館長　小山修三
＊２階講座室。聴講無料。先着120名。

博物館トーク

10月17日(日)　**「平家物語と平家琵琶」**
当館学芸員　望月直子
11月17日(水)　**「亥の子のわらづとを作ろう」**
当館学芸員　藤井裕之
12月19日(日)　**「吉志部の火葬墓」**
当館学芸員　藤原　学
1月16日(日)　**「室町時代の水墨画鑑賞入門」**
当館学芸員　滝沢幸恵
2月20日(日)　**「摂津国垂水荘絵図と考古学」**
当館学芸員　高橋真希
3月20日(日)　**「32号窯跡出土器台と その復元品の製作」**
当館学芸員　藤原　学
＊午後２時から講座室。11月17日(水)は午前10時45分～12時（この日は小学校の団体も参加します）。無料。
＊10月17日には特別陳列の展示解説も併せて行います。

交通案内

- ＪＲ岸辺駅下車徒歩２５分
- ＪＲ吹田駅・阪急吹田駅から
  桃山台駅前ゆき、山田樫切山ゆきバス
  「佐井寺北」下車徒歩１０分
  千里中央ゆき、阪急山田ゆきバス
  「岸部」下車徒歩１０分
- ＪＲ吹田北口から
  五月が丘南ゆきバス
  「五月が丘西」下車徒歩７分
- 阪急南千里駅から
  ＪＲ吹田ゆきバス②、③系統
  「佐井寺北」下車徒歩１０分



吹田市立博物館だより　第２３号
平成16年(2004)10月１日発行
吹田市立博物館
〒564-0001　吹田市岸部北４丁目10番１号
TEL.(06)6338-5500　FAX.(06)6338-9886

●開館時間　午前9時30分～午後5時
●休 館 日　月曜日と祝日の翌日
年末年始（12月28日～1月4日）
http://www.suita.ed.jp/hak/index.html

R70 古紙配合率70%再生紙を利用しています